

指定された駅で電車を降りる。待ち合わせ場所は改札口。階段を降り、改札へと向かう。

空港で会うなんて、どういうつもりなんだろう。かれこれ一年は会ってないし、連絡もとってなかった。

改札口を出て見回すと、右手を上げる修平に気がついた。私を見てうなずくと、こっち、と手で誘導する。ひさしぶり、とか、元気だった？とか、何か言ってくれてもいいのに。何の挨拶もなしで、くるっと背を向けて歩き出す修平を、私はあわてて追いかけた。

修平、こんなに足が速かったっけ？ そんなことを思いながら必死についていくけれど、距離はひらく一方。油断したら見失っちゃう。

「ねえ、どこまでいくの」

大声を出したつもりだったけど、修平はどんどん先へ進む。ねえってば、と言いかけて、



二人のあいだの距離にがく然とする。

私が一步進むあいだに、修平は三步進んでいる。実際はそんなに差がないかもしれない。でもどんなに急いでも、追いつけるとは思えなかった。きつともう無理なんだ。この距離を埋めようなんて、考えないほうがいい――。

私は立ち止まった。修平の姿はもう見えない。今ごろはずっと先を行っていて、私がいないと気づくこともないだろう。

「足が痛い……」

周囲を見まわすと、トランクやポストンバッグを脇に置いた人たちでにぎわっている。楽しそうに言葉をかかし、同じ方向を見ていた。私も目をやると、出発便と到着便、予定時刻などの案内が表示されている。

ここは、空港……？

座るところを探したが、椅子は全部埋まっている。幸せオーラをふりまく男女に目がいつ

た。たぶん恋人同士。もしかして新婚さん？ 旅行先でケンカして別れたりしないでね。――

――ごめん、大きなお世話だよね。

すぐそばの椅子が空いたので、よっこいしょと腰をおろす。やだ、おばあさんみたい……でもしようがないよね。

両手でふくらはぎをさすった。少し揉むと気持ちがいい。まったく、誰のせいでこんなに疲れてるのよ。修平がどんどん進んじやうからだよ。こんど会ったら思いっきり責めてやる――。

修平のことを考えたら、自然と手に力が入る。少しずつ、疲れがやわらいでいった。それにしても、空港なんて来たことあったかな。

母との旅行はいつも鉄道で、父の赴任先に行くときでも鉄道を使っていた。飛行機ならすぐなのに、と言っても、母は取り合わなかった。お金がかかるから嫌だったのかな。

リュックからペットボトルを取り出す。水滴がリュックにつかないようタオルで巻いた

けど、どうかな。駅のホームで買ったペットボトル。水以外は全部売り切れだった。

本当は、ノンカフェインのお茶をわかして冷まし、水筒に入れてきたかった。でも昨夜からいろいろあって、淹れるのが間に合わなかった。タオル越しに冷たさを感じる。蓋を開け、ひと口飲んでみる。冷たい水がのどを通りすぎる瞬間、大げさかもしれないけれど、救われた気分になった。細胞のひとつひとつに、しみわたっていくようだ。

「あゝ」

意図せず声が出て驚き、周囲を見まわした。さいわい誰も気に留めていない。安心して、ペットボトルの水を半分ほど飲み干す。そしてタオルでまた丁寧に巻き、リュックにしまった。

ちょうどそのとき、私の前を女性が通りすぎた。笑っていたので、えっ、と思ったら、女性が振り向き、反対側の耳にあてた携帯電話が見えた。なんだ、そういうこと。

——空港、初めてじゃない。前に母と来たことがある。

ふいに記憶がよみがえった。子どものころ、出張帰りの父を迎えにきたような気がする。でも飛行機が遅れて、しばらく待たされたんだっただけかな。

あらためて周囲に目をやる。立ち上がって、トランクを押しながら移動する人。入れ替わりに重そうな荷物を持ってやってきて、疲れた疲れた、と言って座る人。まだ目的の便が来ないのか、楽しそうに話しつつづける人……。あのとときも、今日と同じくらいにぎやかだった。

その日、私は朝からはしゃいでいた。空港へ行くなんて初めてだったし、普段乗らない電車に乗るだけで心が躍った。このあとなにが私を待っているのかと、考えるのも楽しかった。母はというと、仏頂面で機嫌が悪かった。電車を降りるたび、次はどうするのかと私が聞いたので、説明するのが面倒だったのかもしれない。当時、何本も路線を乗り継いだ記憶がある。いつもの私なら、機嫌の悪い母を気づかって大人しくしていたと思う。でもそんな余裕はなかったし、初めて来た空港は、目に映るものすべてがきらきらと輝き、まるで絵本から飛び出したように色鮮やかで、本当に魅力的だった。

飛行機が遅れてるんですけど、と母が言ったときも、じゃあ飛行機見にいったいい？と尋ね、返事を待たずに走り出した。体がふわふわと浮いているようで、床に足がついているのかわからなかった。童話に出てくるお城の、ふかふかのカーペットの上を走っているみたい。そんなことを思ったりもした。

父と合流し、空港のレストランで食事しているあいだ、母は何度も私に注意した。奈保、食べ方が汚いわよ、もっときれいに食べなさい、フォークはこっちの手で持つの、ナイフはこう、ストローで音を立てて飲むんじゃない、ほらこぼすわよ、などなど。おかげで食事を終えるころには、すっかり空港が嫌いになっていた。あんなにはしゃいでいたのに……。

でも、なんで修平はここへ来たんだらう。私が子どもだったときのことなんて、知ってるはずなのに。そうよ、私だって知らなかったんだから——って、厳密には知らなかったわけじゃないけど。

母は？ 母なら知ってるけど、私は紹介してないし、修平と会ったことはないはず。修平が勝手に会ったとか？ なにそれ、ありえないんだけど。もう、なんで母のことでこんな…：せつかく縁が切れたと思ったのに。

お母さんの言うとおりにしてたら大丈夫。全部うまくいくから。

そう言われて育った私は、ずっと母の言うとおりに行動してきた。

中高一貫の女子校に入り、大学も母の希望どおり国立へ進んだ。勉強は楽しかった。やればやっただけ結果が出る。成果を目の当たりにできてとても励みになったし、なにより母に喜んでもらえることが嬉しかった。

卒業を前に、私も就職を考えた。けれど周りの友達が内定を得ていくなか、私はいつまでも内定ゼロ。大学三年の秋から就活を始め、年が明けても決まらなかつた。それでも、秋まではきつと内定もらえると思ってた。だってお母さんの言うとおりにしてるから。

今考えてもぞつとする。なんであんなに信じていられたんだろう。

大学四年の暮れになっても、私は内定を得られなかった。さすがにまずいと思い、内定を得た友達に話を聞いてみたのだが、彼女たちは一日限りのアルバイトでも、希望の仕事に近いものを選び、さらにはインターンシップも経験して、内定獲得に向け様々な努力をしていた。

母が私に教えたのは、出過ぎた印象を与えないメイク、なにも言わず微笑んで性格の良さをアピールすること、不快感を与えない服装など、見た目に関することばかり。就活のスタートラインにも立てない私が、内定を獲得できるはずもなかった。

それでも母は、お母さんの言うとおりにしていれば大丈夫、と繰り返した。内定ももらえないのはお母さんのせいよと私が言えば、お母さんの言うとおりにしないからと私を責める。私は反論し、ずっとお母さんの言うとおりにしてたのに、面接にすら呼んでもらえない、就職が決まらないのはお母さんのせいよと言った。それでも母は私に干渉しつづけ、私は母を

拒みつづけた。

卒業式の前日にやっと決まった仕事は契約社員。とうてい母が満足するものではない。案の定、お母さんの言うとおりにしないから、正社員にもなれないのよ、と嫌味を言われた。生まれて初めて、母から離れたと思った。もちろん母がそんなことを許すはずがない。許されなくても、いや、許されないからこそ、家を出るしかないと思った。そう母に宣言もした。

私が反抗的になったと、母は電話で父に愚痴った。こと無かれ主義の父は、お母さんを困らせるなと言うばかり。

とにかく家を出たい。その一心で仕事に打ち込み、二年目を迎えるころには念願の一人暮らしを始めていた。

修平に会ったのは、三回目の契約更新を終えてすぐだった。取引先の人に連れられて、あいつつ回りに来たのだった。

新入社員の修平は笑顔がさわやかで、たどたどしいところもあったけど、一生懸命に新商品の説明をしてくれた。その姿に女子社員は全員メロメロ。私も同じ。彼の笑顔に夢中だった。でも年上だし、ほかにきれいな人はたくさんいたから、まさか私が選ばれるなんて思わなかった。

内緒で付き合い始めたのに、いつのまにか知れ渡ってしまっていて驚いた。ずいぶん嫌味も言われたし、仕事もやりにくくなった。用意したはずの資料がなくなっていたり、お客さんにお茶が出てないよと言われたり（もちろんお茶は出した）。それまで笑顔で接してくれていた人に無視されることもたびたびあって、それがいちばん堪えたかもしれない。そんなこんなで次の契約更新はなさそうだと感じたので、早々に次の仕事を決めた。念願の、というべきか、正社員の仕事だった。

新しい職場が決まったその日、一人暮らしのアパートを引き払い、修平と暮らし始めた。でも半年で解消。一緒に暮らすってどういうことなのか、よく考えていなかったし、細かい

ルールなど必要ないと思っていた。

修平が、家事はできるほうがやればいいと言ったとき、私は手のあいているほう、早く帰ってきたほう、と解釈した。本当は、それどういう意味？ と聞かなくてはいけなかったのに。修平と暮らせることがうれしくて、一緒にいたいだけだった。それに細かいことを言い出して、修平の機嫌をそこねるのも嫌だった。

必然的に、というべきか、家事をするのは私一人。修平が早く帰っていても、夕飯を作ることはなかった。できるほうがやるというのは、自分ではできないから私にお任せ、という意味だったのだ。見直しを提案しても、お互い同意したのだからと言われて終わり。

なぜ私だけが。そう思いながら、不満たらたらで夕飯を作る。食べているときも不満は消えない。

そんな顔見ながら食べるかよ、と修平は出ていき、私は一人で残り物を片づける。こんなはずじゃなかったと思っても、どうしたら理想の生活が送れるのかわからなかったし、相談

できる人もいなかった。

同棲を解消したいと言ったとき、修平は寝耳に水という顔だった。大慌てで、やり直そうと言った。自分も手伝うからと。でも、具体案はなにもない。その場しのぎだとすぐにわかった。

そもそも一緒に暮らすのはどういうことか、わからないうちは何度やり直しても同じだと私は言った。すると修平は、じゃあしばらく距離を置こうと言った。なんでそうなるの？と思ったけど、言い争うのも面倒だったから受け入れた。もう疲れた、というのが正直な気持ちだった。

あれから一年。連絡を取りあうこともなかったのに、突然メールが来た。明日会おうというもので、待ち合わせの場所と時間だけが書いてあった。

深いため息が出る。

そもそも付き合ったのが間違いだっただ。考えないようにしていたけど、やっぱりそう



としか思えない。付き合ったりしなければ、馴染みのある会社で契約を更新してもらえたかもしれないし、同棲してお互い傷つくこともなかった。付き合っただけでほしいと言われたとき、嫌だと言えよ。よかった。そうすれば、今ごろはきつと——。

「ここにいたのか。探したぞ」

ハツとして顔を上げると、せいぜい言いながら、修平が私の前に立っていた。

「修平、どうして……」

「振り向いたらいないからさ、焦ったよ。でもよかった」

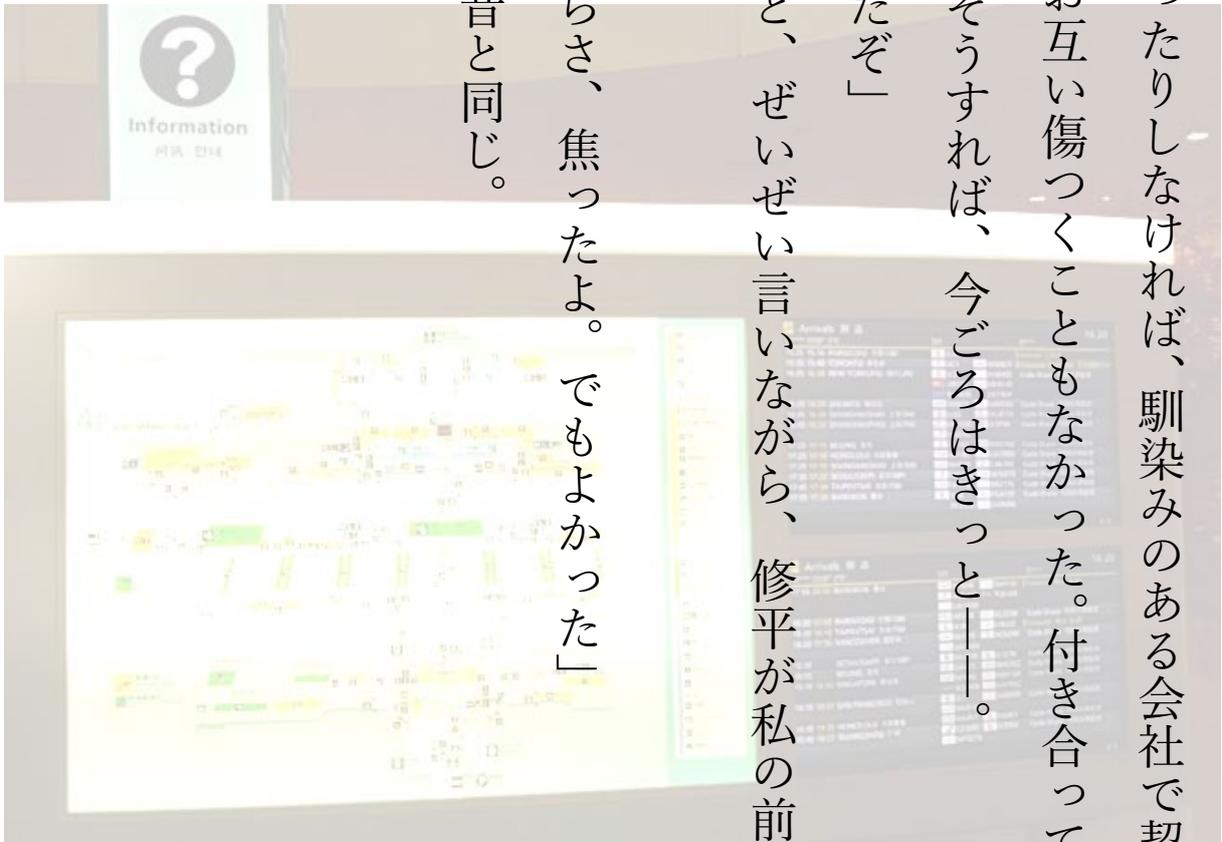
修平が笑う。頬の笑窪は昔と同じ。

「さあ、行こう」

修平は手を差し出した。

「まだ旅は終わってない」

「どうということ？」



「メールに書いただろ、見せたいものがあるって」
そんなこと、書いてあったかな……。

「ほら、早く」

修平は私の手を取り、立ち上がるよう促した。以前の私なら、こういうちよつと強引なところを頼もしく思ったかもしれない。でも今は――。

「いや！」

立ち上がり、修平を睨みつける。

「あなたの思いどおりになんてならないから！」

修平に背を向け、私は歩き出した。次第に早足になり、しまいには走り出す。奈保、と呼ぶ声があった。修平はどうしていいかわからず、立ちすくんでいるにちがいない。いい気味。

走り出したら、飛行機が見たくなった。

あの日、大きな飛行機を見てわあーと声を上げた。あんな大きな飛行機が飛ぶんだね、す

ごいね、とかなんとか言ったかも。母はちよつと困った顔をして、それからどうしたかな……。

立ち止まって思い出そうとした。でも思い出せない。そんなことより飛行機見なきゃ。どこで見られるんだろう。案内図とかないのかな。一步踏み出したら、ふくらはぎがまた痛い。すぐそばのドアが開いて人が出てきた。飛行機が見える！

閉まりかけたドアを大きく開く。ラウンジのようだ。窓の外には、飛行機がいっぱい。あるとき飛行機を見たのは外だったかもしれない。今は中から見られるんだ。エンジンの音も聞こえ、臨場感ある。ねえお母さん、と振り向きかけ、我にかえった。なぜだか、母と一緒に見ている気がした。

母とはしばらく話していない。最後に話したのって……半年前かな。

同棲を解消したあと、社員寮に入れてもらい、住所が変わったと母に知らせたのが半年前。



すぐに母が訪ねてきた。驚いたけど、私を叱りに来たのだと思った。同棲したことも解消したことも転居通知には書いていない。でも母のことだから、どこからか情報を仕入れ、同棲なんてふしだらな、嫁入り前なのに、そう言うに違いないと。

ところが、母はそのことについてなにも言わなかった。それどころか、私の部屋にあがって室内をきよろきよろ見まわすと、いいお部屋ね、と言ったのだ。

「えっ」

驚いた私に母は驚き、「なんでそんなに驚くの」と言った。

「だって、そんなこと言われると思わなかったから」

「変な子」

そう言って母は笑った。私の知る母とは、まるで別人だった。

「それで、どうしたの急に？」

私が水を向けると、母はうつむき、「うん、ちよっとね」と言った。

Information
010 214

「ちよつとね、じゃわからないよ」

「うん……」

母はうつむいたまま動かなかった。私もなにと言わず、テーブルをはさんで向かいあっている。はたから見たら、異様な光景だったかもしれない。

どのくらいたっただろうか。母は顔を上げ、

「じゃあ、また来るわ」と言って立ち上がった。

「えっ」

「じゃあね、元気で」

そのまま振り返らず、母は玄関へ向かう。私はあっけに取られ、母のあとを追うこともしななかった。椅子の足元には、寮の皆さんに差し入れ、と母が持参した和菓子詰め合わせが置かれていた。世の中の母親は、そういうものなのかもしれない。でも私の母がそんなことをするなんて、思ってもいなかった。

あのお菓子は、たしか寮母さんに渡したんだっけ。わざわざすみません、ありがとうございます、と言ってくれて、なんだか変な気持ちがあったのを覚えている。

目の前の飛行機を見ながら、空港で見た母の顔を思い出そうとする。駄目だ、やっぱり思い出せない……。

幼いころの私にとって、母は師であり人生の先輩だった。

大学を出るところまで、私はずっと母を師とあおいできたわけで、その絶対的な地位を母は失ったのだ。師ではない、一人の女性である母と、どう接したらいいのか、いまだにわからない。

「お母さんも、楽しかったのかな……」

飛行機を見ていたときの顔は思い出せないのに、食事中のこわい顔はよく覚えている。私
がフォークやナイフを動かすたび、小言が飛んできた。そのとき父は、どんな顔をしていた

だろう。覚えていない。そういえば、あの日父は一緒に帰宅したのだろうか。それも覚えていない。たしかに空港で父と会って食事をした。でもそのあとのことは、記憶から抜け落ちている。

父の存在は、母に比べて小さかった。たぶん母の存在が大きすぎたのだ。仕事が忙しく、母にすべてを任せていたのかもしれない。でも本当にそうだろうか。半年前、母はなにを言いたかったのだろうか。

「ああもう、考えるのやめ！」

頭を左右に大きく振る。考えたって結論は出ない。あのときのことは、私にとって楽しい思い出。それでいいじゃない。お母さんだって、言いたいことがあればまたなにか言ってくるでしょ。

このあとどうするかを考えなきゃ。修平には会いたくないし、もう帰ろうかな。リュックにつけた腕時計を見る。あれから一時間。修平もそろそろあきらめたか、あるいは反省した

かも。そうだ、メール来てるかな？

携帯電話を上着のポケットから取り出す。新着メールが二件。

一件め。修平から。「奈保、話し合おう。どこにいるか連絡してくれ」

反省してないじゃん！ 無視無視。

二件め。見覚えのないアドレス。やだ、迷惑メール？

削除しようとして、アドレスの文字が目にとまる。「naho—akilho」あきほ。母の名だ。大學生のとき、母のパソコンを設定して、メールアドレスはこれにすると言われた。あきほだけいいじゃん、と言ったら、奈保と一緒にいいのよ、と言ってたっけ……。

じゃあこのメールは母から？ 思い切って読んでみる。

「奈保、これまで黙っていたけど、お父さんとお母さんはずっと前に離婚したの。あなたが大人になって、独り立ちするまで内緒にしようとして二人で話しあって決めました。半年前あなたを訪ねたのは、すべて話そうと思ったから。でも切り出せなかった。いくじなしのお母さ

んを許してね。あなたのメールアドレスは修平さんから聞きました。修平さん、とてもいい人ね。幸せになってね。 母より」

離婚？ ずっと前？ どういうこと？ それに修平からアドレス聞いたって……。

携帯電話がメールの着信を告げる。あわてて開いた。

「なぜ修平さんを知っているの、と疑問に思うかもしれないわね。あなたが家を出たあと、アパートまで行って、でも会わずに帰ろうとしたとき、修平さんに話しかけられたの。『もしかして奈保さんのお母さんですか』って。そんなに似ているかしらね」

やだ、そんなことがあったんだ。修平、なにも言ってくれなかった。

「修平さんからはその後、同棲することになった経緯や、あなたの近況など、いろいろ知らせてもらいました。それも一年前までですが。同棲を解消したことは、あなたの転居通知で知りました。半年前あなたを訪ねたとき、とくに触れる必要もないかと思って言わなかったのだけど、気分を害したらごめんなさい」

同棲とか解消とか、知ってたけど言わなかったってこと？ それは、地味に傷つくかも…。

「お母さんは今、飛行機を見えています。覚えているかしら、一緒に飛行機を見たこと。楽しかったわ。でもお父さんと話し合いをして、そのあと見た飛行機は切なかった。楽しいことだけ、覚えていられたらいいのにね」

そのあと見た飛行機——楽しいことだけ——。
携帯を持ったまま室内を見まわした。母の姿はない。スタッフに声をかける。

「あの、飛行機が見られるのってここだけですか」

答えを聞くやラウンジを飛び出し、一目散に屋上へ向かう。

母の言葉で思い出した。食事のあと、もう一度母と飛行機を見た。でも母は、泣きたいのを必死でこらえていた。見送った飛行機には父が乗っていたのだ。

半年前、なんで言ってくれなかったの？ 私じゃ駄目だったの？ ねえお母さん、なんで

――。
屋上にたどりつくくと、飛行機がさつきよりもいつそう大きく見えた。エンジンの音も大きく、顔を近づけないと会話もできないほど。そのせいか、みんなお互いの目をのぞき込むように話している。息をととのえ、あらためて母を探した。

「いた！」

駆け出して、すぐに足を止めた。なんで、修平と一緒にいるの？ 二人の後ろ姿をじっと見つめる。母が振り向いた。目が合うと、母は笑ってうなずいた。それを合図に修平も振り向く。顔を合わせたくなくてうつむいた。修平には会いたくない……。

足音が近づいてくる。修平だ。きっと私の手を取って、母のところへ連れていくにちがいない。見せたいもの？ 会わせたい人の間違いじゃないの？ 修平の姿を見たくなくて、ぎゅっと目をつぶった。

「じゃあ、俺はこれで。あんまりお母さんに心配かけるなよ」



——え？

「どういうこと？」

目を開けて叫んだ。修平は私のそばを通りすぎ、下へ降りようとしている。

「修平！」

修平は笑って右手を上げた。そして前を向くと、振り返らずに降りていった。

「奈保」

振り向くと、母が笑顔で手招きをしている。なぜだか急にドキドキして、深呼吸で気持ちを落ち着かせる。それからゆっくと、一歩ずつ踏みしめるように歩いていった。心の中で、母に語りかけながら。

ねえお母さん。あのとき、お父さんは帰ってきたんじゃないかと、空港からとんぼ返りしたんだよね。今思い出したよ。

お父さんとお母さん、食事のあと、真剣な顔で話してた。私は気づかないふりで、食事前



に見た飛行機の話をした。

あんまりしつこく言ったから、お父さんが、じゃあまた飛行機を見ようと言った。でもお父さんは見なかった。私が見たのは、お父さんを乗せた飛行機だったから。

お母さん、泣きそうだったね。私も泣きそうだったよ。どうしようお父さん行っちゃう、って思った。

でもお母さん、泣くのを我慢してたよね。泣きそうなとき、お母さん、いつも私の手を握ってくれた。だから私も、お母さんの手をぎゅっと握ったの。お母さん、握り返してくれたよね。

なんでだろう。今日、ここに来るまですっかり忘れてた。

母のそばへ行き、そっと手を握る。とてもあたたかい手だった。

「久しぶりね」

母は本当にうれしそうな、重荷をおろしてスッキリしたような顔をしていた。



「離婚おめでとう」

母はうなずいて、顔を近づけた。

「結婚したら、修平さんとうまくやりなさいよ」

「それをお母さんが言う？ 離婚した人が？」

たしかにね、と母は笑った。私もつられて笑う。こんな風に母と笑いあえたのも、修平が連れてきてくれたおかげかな。

「ねえ、お母さん」

「なに？」

「今日ここへ来るのは、どっちから言い出したの？ 修平？ それともお母さん？」
うふふ、と母は笑う。

「どっちでもいいじゃない。大したことじゃないでしょ？」

「——そうだね」

たしかに、どっちでもいいように思えてきた。もっと大事なことがある。ね、お母さん。

「なに？ ニヤニヤして変な子」

「うん」

母がまた笑う。目じりに光るものが見え、私は母の手をぎゅっと握った。ぎゅっと母が握り返す。懐かしいぬくもり。

「お母さんはさ」

母が私を見て、首をかしげる。子どものころ、よくこうやって話を聞いてくれたっけ。あたたかいものが胸の奥からこみ上げ、言葉が続かなくなった。涙も出てくる。なんと続けるつもりだったのか、もうわからない。母が私の背中に触れ、さらに涙があふれる。

「奈保、大丈夫よ。お母さん、ここににいるからね」

うん、うん、とうなずく私。やっぱり涙は止まらない。こんなに泣きじゃくって、まるで子どもみたい。でも、涙と一緒に、今までのわだかまりも流れていく気がした。泣いて全部

出し切ったら、きつとスッキリするだろうなあ。そう思ったたら、
なんだか笑えた。



おわり

